

ウラナミシジミは幼虫が栽培種のマメ科植物（フジマメ、アズキ、ソラマメ、エンドウ、ササゲなど）の実を好んで食べ、松波町や西畑地区でごく普通にみられます。シジミチョウの仲間では特に飛ぶ力が強く、気温が上昇するとともに日本列島を北方へと移動を始め、世代を繰り返しながら東北から北海道まで到達します。まるで北海道の小豆はうまいから早く行こうよ、と頑張っている気配ですが、かわいそうに冬を越すことができずに、北上した世代はすべて死滅するといわれています。

♂は翅表が青紫に輝き、♀は羽の縁の褐色部が幅広くうす青の鱗粉なので一見して雌雄の判別



ができます。西畑の花畑では10月から11月にかけての秋に最も個体数が増して、いたるところで花の蜜を吸います。羽の裏面は和名のとおり波模様が

あって、後翅の尾状突起が出ている基部にはオレンジ模様とその中に黒い眼状紋があります。これらは、小鳥などの外敵に対して、この尻尾側が頭だよ、とごまかすための自然が創り出した擬態模様で、シジミチョウはこの後羽を交互に上下にすりあわせるような動きを繰り返しますが、その動作にどういう意味があるのか分かりますか？

細長い尾状突起は2対そろって目玉模様から生えたアンテナ（頭部触覚）に擬態しており、後羽を交互に上下運動する動作は、ゆれるアンテナと根元が目玉模様で頭がこちらにあると錯覚させる実に巧妙なうごきなのです。小鳥が目玉模様を目印としてその偽の頭部分を攻撃した場合、チョウは後羽の端を食いちぎられたとしてもそのまま飛び逃げることで命は助かるというわけです。きびしい生存競争に打ち勝つためにデザインされたこれら自然の仕組みと偽装デザインを、羽の動きでしっかり活用しているシジミチョウには感心するばかりです。

